

氏 名	姜 若 冰
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 295 号
学位授与の日付	平成 16 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	「元輕」と「白俗」の間 ——元稹白居易比較詩論——

論文調査委員	(主 査) 教 授 川 合 康 三	教 授 平 田 昌 司	助教授 木 津 祐 子
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は中国唐代中期の代表的な詩人、元稹と白居易の詩について比較研究を行い、両者の異同を明らかにした上で、元稹の詩風の独自性を究明したものである。

論文は序章および第一部、第二部から構成されている。

序章では、本論の問題提起と関連する主な先行研究を紹介している。

生涯の親友であった元稹と白居易とは中唐時代において「元白」と併称され、当時の文壇をリードしていたことは周知の通りだが、時代が降るにつれて白居易の影響の方が大きくなり、元稹の方はその詩集すら元来の姿を保つことができなくなった。また研究状況についても、白居易の詩に関する研究は盛んに行われ、厚みのある業績も積み重ねられているのに対して、元稹に関する研究は最近になってようやく始まったばかりであり、課題はまだ多く残された状態に止まっている。一方両者の詩風については、北宋・蘇軾によって「元輕白俗」という評語が下されてから、広く認められてきたのである。本論は元詩の後世において影響が弱まった原因と、「元輕」「白俗」という両者に対する評価が与えられた所以を解明することを目的としている。

両者の比較のために、同じ題材を用いた作品を取り上げて考察を進め、第一部では家族に関する詩、第二部では夢に関する詩を取り上げている。

第一部第一章では唐代の家族（妻と子供に限る）に関する詩がどのように変貌していくかを概観している。中国古代の士大夫が家族内のこと、つまり妻や子供との家庭生活を詩に取り込むことは「礼制」上における一種の自己規制があるように思われ、従って、詩作品を通しては彼らの家族に関して殆ど伺い知ることとはできない。しかし、妻や子供が亡くなった時に限って、その死を悼む「悼亡詩」（妻）や「哀辞」（子供）が作られ、悲しみの感情を述べることができたのである。この状況は唐代に入ると、変化し始め、唐代の詩人は家族の死という事件に巡り会わなくても、妻に詩を贈ったり、子供を詩に詠ったりするようになる。唐代の人々は家族団欒の楽しみに文学的要素を見出し、それを表現することに目覚めたのである。

第二章では、元稹と白居易が彼らの妻を生きている時点で唱った詩、また妻に贈った詩を通観しながら、比較している。

妻が死んだあとでのみ文学として表現されていたそれ以前の時代と異なり、唐代では生きている時の妻に関する詩が作られるようになったとはいえ、いまだに妻との離別の悲しみ、言い換えれば死別と同じように会えないという状況下で詩を詠むことが主流であった。それが中唐期の権徳輿や白居易などの詩人に至ると、離ればなれの状況でなくても、日常生活の中で妻に詩を贈ったりする事態が出現したのである。特に白居易は妻とともに白髪になるまで年をとり、一緒に老いていく「偕老」の考えを結婚生活の理想として掲げた。彼の閑適思想はこのような作品を生み出す土壤であると考えられるが、妻に贈る「贈内詩」の歴史において、彼は画期を作ったといえよう。一方、元稹は、亡くなった先妻について大量の「悼亡詩」を遺したが、生きている時の妻を詩に詠うことには特に意欲を示さなかったのである。彼の継室に関して書いた詩文も、妻との間に於ける問題など、自分を取り巻く諸問題をそのまま剥き出しにただけであり、親友の白居易とは鮮やかな対照

を見せている。

第三章では、妻に続いて、子供に関する詩を考察している。

前章同様に、唐代以前の同題材の作品を背景として参考にしながら、唐代の代表的な詩人、李白、杜甫、韓愈、李商隱の子供に関する詩を分析した。李白の死に見られるのは自己主張の強さ、杜甫は終始一貫、子供たちの生活や成長をあたたく見守り、韓愈は子供の教育にだけ気を配り、李商隱は子供の前に自分の行き方を否定するなど、各々の詩人が独自の特色を見せていることを確認した上で、白居易と元稹の作品を分析した。白居易が子供との生活の中で起こる喜びや悲しみを全方位的に文学として表現していたのと正反対に、元稹は子供の死だけを詩に取り込んだのである。また元稹の詩に取り上げられた子供は、彼とともに左遷先を転々としていた、苦勞と一緒に味わっていた子供に限られる。彼にとっては、やはり家族団欒の生活を楽しむことよりも、自分の対面せざるをえない問題こそがまず文学として成り立つのである。

第四章では、兄弟に関する詩を取り上げている。

兄弟は、先の二章で考察してきた妻と子供の場合とは異なり、家族関係の中で唯一、詩文学において早くからその関係や感情が表現されてきた素材である。古くは『詩経』からすでに兄弟の愛情が強調されていた。唐代以前にも文学を担う士大夫たちは自分の兄弟と詩のやりとりを楽しんでいたのである。しかしこうした広く浸透した素材においても、詩人によって異なる性格を見せている。ここでは唐代の主な詩人の、この題材における詩を通覧してから、元稹と白居易の作品を較べている。白居易は若い時からずっと兄弟の間における愛情を詩に詠い、晩年は特に弟の白行簡と人生経験を語り合ったりしているのであるが、元稹は自分の実の兄弟を相手に詩を作る事は少なく、反対に小さい時に身を寄せていた母の実家の従兄弟たちとは、五十韻にのぼる排律を数首も交わしている。そしてその内容は大半、少年時代の従兄弟との遊樂を懐かしく回想するものである。

第二部では、家族関係から離れて、詩に於ける夢描写の角度から、同じように元白の異同を探った。

第一章では、元白に入る前に、中国古代における夢認識の諸相を振り返っている。

第二章では、散文体の文学に於ける夢の用いられ方を略述している。

第三章では、詩に於ける夢の表現法を歴史的に通観している。その歴史的変遷は、唐代以前では、歴史書や伝説などからの影響が強く、詩においては、夢の内容についての描写が殆ど行われなかったが、唐代に入ってから「悼亡詩」においても、「遊仙詩」においても、夢の内容がより詳細に描かれ、従来の伝説に由来する夢の定型的な扱い方が破られ、実際にありうような夢の内容を叙事的な手法を駆使して描く詩が数多く現れたことを結論として確認している。

第四章では、元稹と白居易の夢に関する詩を較べている。第一部の家族に関する詩と違って、二人とも夢に関して大量且つ均等な量の作品を遺している。比較するに際してはやはり同じ題材の作品を選んでいる。その結果、白居易の夢の扱いは唐代の他の詩人に似て、夢を自らの感情を表出するためのきっかけとしか見なさず、夢の内容描写には興味を示さないとすることを明らかにした。その端的な表象として、彼は夢に言及する際に、「昨夜」という時間詞を用い、目覚めてから抒情の必要に応じて、夢を断片的に回想するのである。対して元稹は夢を描く時に「昨夜」という時間詞など一切使わず、時間の流れに沿って夢を描写し、覚醒後の抒情へと移っている。彼は夢そのものの描写を通じて抒情を成り立たせようとしたのである。

結論として、元稹には白居易のような「融合」的な思想や態度がなく、彼の文学はありのままの自分を隠さず、素直に吐き出すところに、親友の白居易や他の詩人との違いがあると考えられる。そのようなところが、中国古典詩の「公」的な性質とは相容れず、「軽薄」と見なされたのではないかと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

中唐の文学を代表する文人のなかでも、元稹と白居易の二人は早くから「元白」と併称されてきた。それは二人が一生を通して深い友情によって結ばれ、文学においても唱和詩をはじめとして活動をともしたことによる。しかし論者が「序章」で説いているとおり、実際には元稹は白居易ほどに浸透しなかったし、その評価も白居易には到底及ばない。両者の文学の違いはどこにあるのか、それが論者の掲げた問題の一つである。そうして元白の差異を明らかにするとともに、白居易の影に埋もれがちだった元稹独自の価値を発掘することが、論者のもう一つの意図である。

晩唐・五代から宋初に至るまで、元白は他を圧して大きな影響力をもち、唐代文学の中心的存在とみなされたが、やがて欧陽脩・蘇軾ら宋代を代表する文人が輩出すると、そのあまりにも広範な浸透ぶりがかえって通俗的とみなされて、「元輕・白俗」と称されることになった。「輕・俗」というこの呼称には、元稹・白居易に対する否定的評価とともに、期せずして元白の共通する面と相違する面との双方をあらわしているが、論者の与えた『「元輕」と「白俗」の間』という論題には、むしろその差異を明らかにしようとする思いが托されている。

元稹・白居易を比較するのの際して、第一部では二人の文学にあらわれている「家族」を切り口としている。それはおのずから文学のなかの夫婦、親子、兄弟を通時的に追跡する研究にもなっている。文学のなかの家族という問題も新鮮であり、本論文にもう一つの意義をもたらしている。

論者はまず歴代の文学のなかに妻や子がどのようにあらわれているか、探っていく。古くは妻の場合は「悼亡詩」、子供の場合は「哀辞」など、その死を哀悼するための様式化されたジャンルがあり、それ以外に妻や子が登場することはなかった。それが唐代半ばに至って大きな変化が生じる。死に限定されず、日常生活のなかの妻や子が文学のなかに登場するようになるのである。このことは文学の題材が日常化する例として従来から言われてきたものだが、論者は新たに家族の団欒というものが、この時期に文学の主題として発見されたことを主張する。論者の捜求によれば、「団円」という、月などのまわることをいうことばが、杜甫や白居易の使用を経て初めて、家族が一堂に会することの意味で使われるようになったという。そして「団円」の語が家族団欒を比喻するに至ったのは、杜甫・白居易に至って家族団欒が文学のテーマとなったことの反映であると論者は説き進む。さらに続けて、この時期の社会の変化が新しい家族の形態や観念を生み出したと述べられていく。家族というものが文学のなかでどのように表現されてきたか、その系譜をたどるうえで論者の考察は貴重なものとなる。

論者は歴代の作品の検討を通して、作者自身の妻や子を日常生活の様々な面のなかに捉えて唱うという傾向が、唐代半ばから見られるようになり、白居易において頂点に達することを明らかにする。ところが目を元稹に転じてみると、元稹は妻にしても子にしても、生きているふだんの状態では作品化せず、死別したあとになって文学の題材にしていることを指摘する。これは元稹と白居易の間に横たわる大きな差異である。また兄弟を唱う文学においても、両者の違いは同じように見られ、白居易が若い時から晩年に至るまで自分の兄弟との交歓を唱い続けたのに対して、元稹は少年時代の従兄弟たちとの交遊を追憶するに留まり、やはり死後の叙述に偏る、という違いを指摘している。

本論の第二部は文学のなかにあらわれた「夢」を取り上げるが、そこにも元白の相違があらわになる。すなわち白居易にとって夢とは自分の感情を唱うための手だてであって、いわば抒情のために夢を利用しているのに対して、元稹は実際に見た夢をそのまま記述しようとする。白居易の夢の扱い方は他の唐代文人と変わるものではないが、元稹のそれははなはだ特異なものである、という。

文学のなかの家族の扱い、夢の扱い、そうした点から元稹・白居易の相違が明らかにされていくが、従来同じ性質の文学と考えられていた元稹と白居易の間に、このように大きな違いがあることは、論者によって初めて指摘されたものであり、本論文の功績の一つに数えられる。そして中唐の文人一般の傾向に近いのはむしろ白居易の方であり、元稹はその時代のなかで異質であったというのも、これまで漠然と抱かれてきた捉え方を覆す指摘であり、中唐文学の再検討を迫るものである。

本論文は如上のように、興味深い指摘の数々を含んでいるが、時としてそれが単に指摘の段階にとどまり、それ以上に考察を深めていないところが惜しまれる。たとえば、妻の場合も子の場合も、まずは哀悼の文学のなかに死を悲しむかたちで登場し、日常生活のなかの生きている姿が描かれるのはそれに遅れるという論者の指摘は重要であるが、しかしそれを指摘したならば、なぜそうなのかを考えることを通して、妻子という題材に限定されず、文学全体の展開に論及することもできたのではないだろうか。

元稹と白居易の相違についても、相違を指摘したにとどまり、今後はその指摘をふまえてさらに元稹の文学の特質を明らかにしていかなければならないだろう。しかしこれまで「元白」として安易に一つに括られていた両者の本質的な差異を説得力あるかたちで指摘したことは、今日においては十分に意義を有するものではある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2004年8月11日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。